

越谷市 PTA 連合会コミュニティキャピタル調査から見えてきた PTA 課題克服のヒント

CR ファクトリーと上智大学研究者が共同で行っている上智大学コミュニティキャピタル研究会では、これまで NPO やボランティア団体（以下、まとめて NPO と略記します）を中心に、組織や団体の中のコミュニティ（共同体）の状態を測定して数値化するコミュニティキャピタル診断を実施し、組織や団体の運営にご活用いただきました。

2019 年度は埼玉県の越谷市 PTA 連合会からの依頼で、越谷市立小学校 30 校、中学校 15 校の全 45 校の PTA 保護者役員を対象にコミュニティキャピタル診断を実施することとなりました。学校 PTA に関しては、PTA 保護者役員を引き受けてくれる人がいないなど、様々な課題が指摘されています。このレポートでは、今回の調査から浮かび上がる PTA 活動の実態と、そこから見えてきた課題克服のヒントについてご報告します。

調査の概要

今回の調査は 7 月と年度末の 2 月の 2 回、各学校の PTA 会長を通じて PTA 保護者役員にネットアンケート調査にご協力を呼び掛けていただく形で行われました。7 月は回答を依頼した PTA 役員数から推定して 90% 以上の回答率の 544 名、年度末の 2 月は新型コロナウイルスの影響もあってか回答が若干減少しましたが、436 名の方に回答をしていただきました。

回答者の特徴を要約すると、

- ・学校平均回答数は 12.3 人。何らかの役職についている PTA 役員の平均人数とほぼ同じと考えられます。
- ・活動歴としては半数以上の 58% が役員経験者。初めて役員を担当する人は残りの 42%。
- ・女性の割合が 87% と多く、男性はごく少数。
- ・役員の方の子ども数は比較的多く二人以上の子どもがいる方が全体の 90%。
- ・フルタイムで働いている人の割合は 15% 程度で、パートアルバイトで働いている人が 50%、専業主婦（主夫）と考えられる方が 15%。

以上の特徴は、全国の公立学校の PTA 保護者役員の標準的な特徴と考えてよいでしょう。

今回の調査では、これまで NPO に対して行ってきたのと同じコミュニティキャピタル診断と PTA の役割に関する独自の意識調査の 2 つを行いました。

コミュニティキャピタル診断とは、コミュニティの状態の良さを決定する 3 つの心理的因子に関する質問に基づいて、各メンバーが団体との間に構築してきた関係性（この関係性をコミュニティキャピタルと呼んでいます）を点数化して測定し、全てのメンバーの得点の平均値で団体コミュニティの状態を測定します。

3 つの心理的因子は具体的に以下の 3 つを指します。

第一因子 理念共感と貢献意欲 団体の目指すところに共感し、団体に貢献したいと感じている

第二因子 自己有用感 団体の中で自分が必要とされている、役に立っていると感じている

第三因子 居心地の良さ 人間関係が良好で居心地がいいと感じている

今回の PTA 調査の結果を 2018 年に実施した NPO の調査結果（回答者数合計 1819 名）と比較してみると、PTA 組織のいくつかの特徴が明らかになってきました。

回答の相関関係は PTA と NPO でほとんど変わらない

研究会がこれまで NPO を対象に行ってきた調査から、各因子の得点が高い人ほど、すなわち団体内でいい関係性が築けている人ほど団体・組織への愛着が高いだけでなく、主観的健康感、主観的幸福感も高いことが明らか

なっています。いい人間関係が健康や幸福にプラスの影響を与えることは広く知られていますが、その傾向は我々の研究でも確認されています。

2019年度越谷PTA調査（回答者合計544名）

	第一因子	第二因子	第三因子	愛着	幸福度	健康度
第一因子	1.00	0.63	0.72	0.81	0.25	0.21
第二因子	0.63	1.00	0.55	0.65	0.25	0.17
第三因子	0.72	0.55	1.00	0.72	0.21	0.20
愛着	0.81	0.65	0.72	1.00	0.24	0.19
幸福度	0.25	0.25	0.21	0.24	1.00	0.47
健康度	0.21	0.17	0.20	0.19	0.47	1.00

比較対象：2018年度NPO調査全体 変数の相関関係（回答者合計1819名）

	第一因子	第二因子	第三因子	愛着	幸福度	健康度
第一因子	1.00	0.58	0.73	0.61	0.27	0.19
第二因子	0.58	1.00	0.60	0.89	0.25	0.16
第三因子	0.73	0.60	1.00	0.60	0.30	0.19
愛着	0.61	0.89	0.60	1.00	0.26	0.18
幸福度	0.27	0.25	0.30	0.26	1.00	0.46
健康度	0.19	0.16	0.19	0.18	0.46	1.00

表1：PTAとNPOの調査の相関関係の比較

上の表は今回のPTA調査（7月分）、下の表は2018年度のNPO調査の相関係数行列です。この相関係数行列はコミュニティキャピタル3因子に加え、団体への愛着、主観的幸福度、主観的健康度の6つの変数について、各ペアの相関係数を示したものです。正の相関関係（ある変数の値が大きいほど、他方の変数の値も大きい傾向）がある場合はプラスの数値、負の相関関係（ある変数の値が大きいほど、他方の値が小さい傾向）がある場合はマイナスの数値を示します。相関関係がない場合は0になります。相関係数の最大値は1、最小値は-1です。左上から右下にかけての対角線のマスの数字が1になっているのは、同じ変数を異なる変数とみなして相関係数を計算しているためです。

NPOと同じような傾向は今回のPTA調査でも観察されました（表1）。表1の上の表はPTA保護者役員に対する調査の各質問の回答の相関関係を調べたもの、下の表は2018年度に行ったNPO調査の相関関係を調べたものです。

どちらの表でもコミュニティキャピタルの3因子および団体への愛着の4変数間の相関係数はプラス0.5を超えて高く、幸福感と健康感の間の相関も0.46と高くなっています。コミュニティキャピタル変数と幸福感、健康感との相関係数はやや低いですが、いずれもプラスの数字を示しています。つまり、3つの心理的因子が高い人ほど団体への愛着が高く、主観的健康観と主観的幸福感も高いことがNPOだけでなく、PTAでも確認できます。

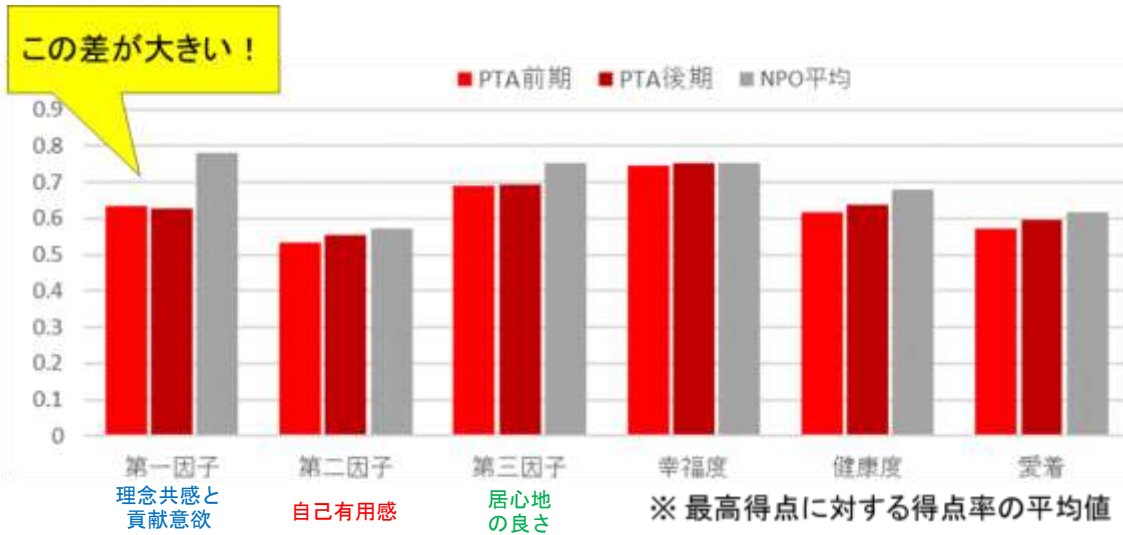
2つの表では数字が1に近いほど濃い赤色になるように作成されており、その色の濃淡を比較すると相関関係の傾向が非常に似ていることがわかつています。PTAはNPOとはかなり性質の異なる人の集まりだと想像していましたが、相関関係を比較する限りPTAもNPOとほぼ同じような組織、団体とみなして分析することができそうです。

しかし、すべての点においてPTAとNPOで回答の相関関係が同じだったわけではありません。

NPOでは3つの因子のうち第2因子の自己有用感が団体への愛着と最も強い相関関係を持っているのですが、PTAでは第1因子の理念共感と貢献意欲が愛着と強い相関を持っていました。因果関係は注意深く検証する必要がありますが、NPOではメンバーに自己有用感を持ってもらうことが大事であるのに対し、PTAでは理念共感と貢献意欲を持ってもらうことが組織の運営において大事である可能性を示唆しています。

PTA コミュのティキャピタルは「理念共感と貢献意欲」が低い

コミュニティキャピタル研究では団体メンバー全員の各変数の平均値で団体のコミュニティの状態を測定しますが、PTAとNPOの比較してみると興味深い違いがあることがわかりました（グラフ1参照）。



グラフ1：コミュニティキャピタル等変数の平均値の比較

PTA 前期は7月に実施した調査の全回答者544名の回答の平均値、PTA 後期は2月実施調査の平均値。それぞれの変数の理論上の最高値を1、最低値を0として比較しています。

コミュニティキャピタルの3因子の平均値はいずれもPTAよりもNPOの方が高くなっており、団体への愛着もまたNPOの方が高くなっていることがわかりました。その中でも第一因子の「理念共感と貢献意欲」の差は特に大きく、平均点で20%近い差が開いています。これとは対照的に第二因子の「自己有用感」の差はほとんどありません。3つの因子に相関があることを考えれば、PTAでは第一因子の平均点はもっと高くてもいいし、自己有用感の平均点をもっと低くてもいいはずですが、実際にはそうならないのです。

この結果はPTAの現状をよく表していると私たちは考えています。PTA役員もある種のボランティアなのでNPOやボランティア団体と同じような結果になってもおかしくないのですが、冒頭でも書いたように近年はPTA役員のなり手がいないという課題を多くの学校が抱えています。自らやりたいという人が集まってPTAが組織されているのであればNPOと同じかもしれませんが、現状はそうではなく、本当はやりたくないけれども他になり手がいないから仕方なく引き受けたという方が少なくないのではないかと想像します。理念共感と貢献意欲が低いのはおそらくそのためでしょう。そして、なり手が少ない理由の一つは、PTA役員の役割が多くの人にとっては重い負担であること。それなりの役割を果たしているから、貢献意欲は低いけれども「自分は必要とされている」という自己有用感は低くないのだと考えられます。

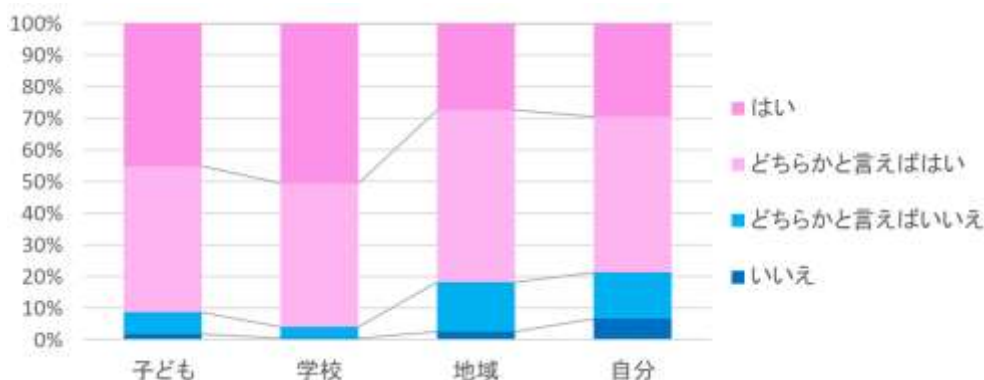
もちろん、すべての保護者役員の方の理念共感や貢献意欲が低いわけではありません。高い目的意識をもって、意欲的にPTA活動をしている役員の方もいます。すでに述べたように、そういう方は自己有用感も高く、居心地が良いと感じており、PTAへの愛着も高い。相関はそれほど高くはないですが、健康感も幸福感も高くなる傾向があるので、意欲的にPTA活動に参加できている人ほど「参加して良かった」「また参加したい」と感じているのではないかと想像します。役員の人に理念共感と貢献意欲を持ってもらうことができれば、PTA役員のなり手不足という課題を解決できるかもしれません。

PTAは誰のための活動か

さて、ここまで説明したようにPTAにとって保護者役員の「理念共感と貢献意欲」が高いことが重要らしいのですが、PTAの理念に共感するというと、多くの方は、自分を犠牲にして子どものため、学校のため、地域のためという気持ちでPTA活動をするべきだと考えるかもしれません。しかし、その固定観念が「なり手不足問題」の原因になっている可能性を示す結果が今回の調査で得られました。

今回の調査ではコミュニティキャピタル診断に加えて、PTAの役割に関する意識調査も同時に行いました。

「PTA は子どものためになっていると思いますか？」という形式の質問を「子ども」のところを「学校」「地域」「自分」と変えて4つの質問に回答してもらいました。



グラフ2：PTAの役割に関する意識調査

「PTAは〇〇のためになっていると思いますか」という問いに対する答えを調べました。〇〇に入る言葉は、子ども、学校、地域、自分の4つ。

回答結果を見ると（グラフ2参照）、予想通り、学校のため、子どものためになっていると思っている人の割合（とてもそう思う、そう思うの合計）は90%超と非常に高くなっています。それと比べると少ないですが、地域のためになっていると思っている人の割合は85%、自分のためと思っている人は79%と半数以上の人が地域のためにも自分のためにもなっていると感じていることがわかりました。

興味深いのはこれらの回答とコミュニティキャピタル診断の回答との関係です。子どものため、学校のためと考えている人ほど第一因子の「理念共感と貢献意欲」が高いと私たちは予想していたのですが、予想に反してそのような関係はあるものの非常に弱く、統計学的には意味のある関係とは認められませんでした。意外にも、第一因子が高かったのは「自分」のためになっていると考えている人たちだったのです。自分のためになっていると答えている人たちは、第一因子だけでなく、自己有用感も高く、PTAへの愛着も高いことがわかりました（表2参照）。

PTAというとは普通は子どものため、学校のためという慈善的な気持ちで参加するのが当たり前だと思っていましたが、考えてみると、PTA活動に参加することで子どもの学校生活や地域に関する様々な情報を得ることができ、人間関係の幅も広がり、その経験を通じて学ぶことも多いでしょうから、自分のためになる要素は実はたくさんありそうです。おそらく、すべての役員さんがPTA活動に参加することで何らかの私的な恩恵を受けているのだと思います。そして、それを認識している人ほど精力的にPTAに参加するというのは当然のことかもしれません。

具体的にどのような恩恵を感じているかについては追加の調査が必要ですが、今回の調査から「PTA役員は自分のためになっていると思って参加した方がいいらしい」ということは言えそうです。「役員はやりたくない」という人に「子どものため学校のためにお願いします」という声掛けに加えて、「やってみると色々いいことがありますよ」という先輩役員の経験をこれから役員になる人たちに伝えていくこともPTA活動を活性化するには効果的かもしれません。

	子ども	学校	地域	自分
第一因子	0.56	0.50	☆☆☆ 0.49	☆☆☆ 0.71
第二因子	0.40	0.36	0.31	☆☆☆ 0.53
第三因子	☆☆☆ 0.46	▼▼▼ 0.32	0.31	0.56
愛着	0.48	0.41	0.38	☆☆☆ 0.67
幸福度	0.21	☆☆ 0.23	0.19	0.21
健康度	☆☆ 0.19	0.13	0.14	0.16

表2 コミュニティキャピタル診断と PTA の役割に関する意識調査の相関関係

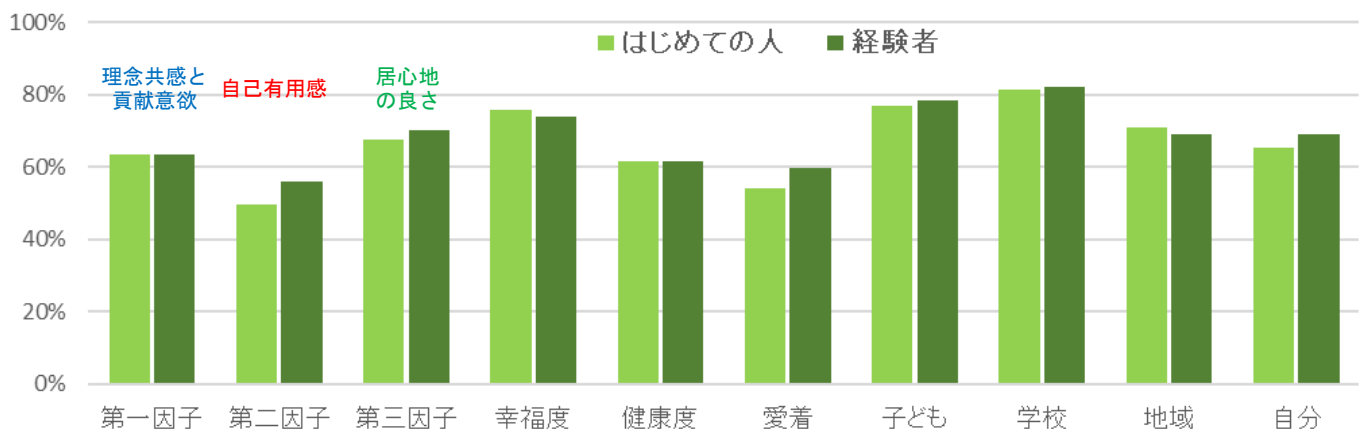
表の数字はコミュニティキャピタル診断の回答（表側に変数名を表示）と PTA の役割に関する意識調査の回答（表頭に何のためになっていると思うかを表す）の相関係数を示しています。すべての相関係数がプラスになっているので、PTA が役に立っていると思っている人ほどコミュニティキャピタルが高く、かつ幸福で健康である傾向があることがわかります。中でも値が高い（色が濃い）のが「自分のためになっている」という回答とコミュニティキャピタル変数の相関係数です。子ども、学校、地域と比べて平均して 20%ほど相関係数が高くなっていることがわかります。

意識調査の回答間には互いにプラスの相関関係がある（たとえば、子どものためになっていると思っている人ほど、学校のためになっていると思っている傾向がある）ため、変数間に本質的な相関関係が無くても、見せかけの相関が生じてしまっている可能性があります。重回帰分析という多変量解析の手法を使ってこの可能性を検証すると、意識調査の回答のうち、コミュニティキャピタル診断の変数に影響を与えている可能性があるのは☆印がついている変数間の関係だけであることがわかりました。星の数が多いほど関係が強く、☆3つは専門的には 1%の水準で、☆2つは 5%の水準で、有意な関係があると判断されます。やはり、最も影響力があるのは「自分のためになっている」という質問への回答でこれに「はい」と答えている人ほど「理念共感と貢献意欲」「自己有用感」「団体への愛着」が高くなることがわかりました。ちなみに▼は統計学的に有意なマイナスの影響があることを意味し、学校のためになっていると思っている人ほど PTA であまり居心地がよいと感じていないことがわかりました。

鍵を握る人たち —経験者と男性役員—

役員経験者とはじめて役員をする人の回答を比較すると（グラフ 3 参照）、役員経験者は第 2 因子の自己有用感が高く、PTA への愛着も高いことがわかります。はじめての人が半数の組織ですから、活動の進め方を知っている経験者が頼りにされることは容易に想像され、そのため自己有用感が高いのだと考えられます。経験がない人と比べて経験がある人の方が愛着を感じるのも自然な結果です。

気になる点は第一因子の理念共感と貢献意欲がはじめての人とほとんど同じであることです。コミュニティキャピタルの 3 因子にはプラスの相関があるので、自己有用感の高さを考えれば理念共感と貢献意欲はもっと高くてもよいのですが、実際にはそれほど高くありません。これは、経験者の人たちが「またやりたい」と思って役員を継続して引き受けてくれたのではないことを意味しているのかもしれませんが、初めて役員をする人は何をするのもわからないので理念共感と貢献意欲が低いのは仕方がないことかもしれませんが、経験者で自己有用感も感じている人が貢献意欲を感じられないのだととすれば、その原因について検討してみる必要があるかもしれません。



グラフ 3 はじめての人と経験者の回答の比較

7 月に実施した 544 人の回答をはじめての人と経験者に分けて回答を得点の平均値を比較したものです。経験者は、第二因子の自己有用感と団体への愛着が高くなっていますが、それ以外はそれほど大きな差がありません。

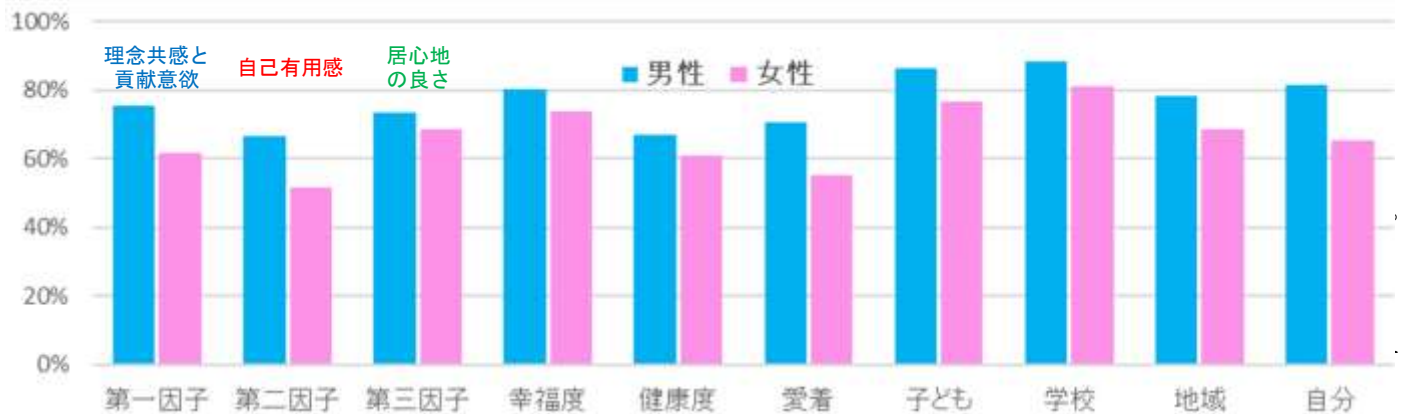
男性と女性には意外なほど大きな差が見られました（グラフ 4 参照）。コミュニティキャピタル診断の回答、PTA の役割に関する意識調査のすべての質問に対して男性の方が女性よりも点数が高かったのです。しかも、その差はほとんどの項目で 20%以上の差がついています。

この大きな差が生じている原因は目的意識の差にあるようです。PTA の役割に関する意識調査の 4 項目すべてにおいて、男性は女性よりも PTA が役に立っていると考えている人が多く、特に「自分のためになっている」

という質問の回答が女性と比べてかなり高くなっています。女性の中にも同じような高い意欲を持った役員はおり、その方たちと比較をすると男女の差はなくなってしまいます。つまり、コミュニティキャピタルの差は目的意識の差で説明がつくのです。

8割以上が女性役員である中で、あえてPTA役員を引き受けている男性の多くは「自分のためにもなる」という強い目的意識を持って参加している人たちが多く、そのためにコミュニティキャピタルが高くなっていると考えられます。

しかし、3つの因子のうち第三因子の居心地の良さは差が小さく、様々な条件をそろえて比較をすると男性は女性と比べて居心地の良さが低くなる傾向があることがわかってきました。仕事以外の人との付き合いに慣れていない男性は女性ばかりのPTA役員の集まりの中で孤立してしまうのかもしれませんが。



グラフ4 男性と女性の回答の比較

7月の調査に基づく比較ですが、2月の調査でも結果はほとんど変わりません。

以上の調査結果から特に重要だと思われる点は以下の3つです。

- ・PTA活動に積極的に取り組んでいる人は自分のためという気持ちを持って参加している人が多い。
- ・経験者は重要な役割を担っているが、必ずしも高い目的意識で参加しているわけではない。
- ・男性の多くは高い目的意識で参加している人が多いが、居心地がいいとは感じていない。

役員のみならず手が見つからず存続の危機にあるPTAですが、今回の調査によればPTAの役員の9割以上が、PTAは子どもや学校のためになっていると考えています。おそらく多くの保護者もPTAに一定の役割や意義があることは認識しているでしょう。「必要なのはわかっているけれど、他の人がやってくれるなら自分はやりたくない」という人が多いのかもしれませんが、PTA活動を「自分のためにもなっている」と思えるようにできれば、役員を引き受けてくれる人、継続して役員をしてくれる人が増えるでしょう。また意欲的に参加している人がPTAの中で孤立してしまわないように、声をかけてサポートをしてあげることも効果的かもしれません。

そのために具体的にどんな取り組みをすればいいのか。研究会では具体的な解決策についても今後研究していく予定です。